

「ふるさと松江再発見」

文芸春秋社を10年前に退社しました。その最後の日の3月31日まで編集長を務めました。頭の中はそればかりで定年後のことを何も考えていないのを案じて、東京双松会顧問の石倉義朗さんが松江の観光プロデューサーの仕事を見つけて下さいました。

それを伝えられた時、松江で何か企画を考えるとしたらと、雑誌の特集号のプランを考える時のように、幾つかの企画が頭に浮かびました。その多くが38年間の編集の仕事で知り合った作家、文化人、芸能、スポーツの各界の人と係るものでした。

また、観光の将来を思うとき、100年近く前から、日本の観光はレジャー、エンターテインメントの要素を求めるアメリカ型の観光となって、行き着くところはテーマパークを作ることになるのです。すなわち「デズニーランド」さなければ「ラスベガス」を目標にすることとなるのです。果たしてこの発想が松江にふさわしいか、松江には違うものがあると思いました。そして、「松江の歴史文化」こそ、売り物と考えたのです。

観光客は何を求めるか。ほとんどの人が体を休めるための保養です。おいしい食べ物、お湯があることです。しかし、それだけで過ごせるのはせいぜい2日、3日目になると何かおさまらない、高学歴の人々です。知的要求が起きるのです。この人たちは＜文化の要素＞が、しかも、都会には無い＜歴史文化＞こそ、求めるものなのです。

観光客も1泊2日の観光バスに乗っての団体旅行の時代が終わり、個人あるいは小グループによる2泊3日あるいは3泊4日滞在して、という時代となっているように思ったのです。滞在してもらうには＜いい食べ物＞＜いい湯＞と＜歴史文化＞の三つが揃わないとだめなのです。それが証拠にかつての温泉地、熱海、伊香保、白浜、雲仙など閑古鳥の鳴くようなさびれた町になっているのです。

松浦市長に会いました。その時お願いしました。「観光プロデューサー」ではなく、「観光文化プロデューサー」という職名にしてほしい。これは先ほどから言っている「文化」「歴史」を考えに入れた「文化観光」の展開がしやすくなるためでした。

編集した雑誌に＜神魂神社＞のことに触れたものがあり、掲載紙をお届けする前に手紙を書いております。平成17年4月1日より松江で働き始め、最初にご挨拶に上がったのはこの神魂神社でした。「ビルマの堅琴」を書かれた竹山道雄さんが感動され、文章を書かれるのも領けました。その竹山さんの文章

を読んで、それほどのものなら観てみたいと知識人の方々が訪れ参拝されるのです。宮司の秋上さんから手紙の礼を言われ、以後、親しくお声をかけていただきました。

お宮では左太神社のたたずまいに感動感じ入りました。朝山宮司に最初の日にご挨拶して以来、深いところのお話をうかがえるのはありがたいことです。

また、三保神社の伊東忠太の設計した拝殿、そして2つのおやしろが並ぶ本殿。この姿にも感心しました。そして、宮司横山宏充さんとの出会いも松江に来て4,5日目のことだったのです。

三保関は他の町と違って通りすがりに寄るところではありません。そのために行くところなのです。「そのため」のものをどう見出すか。私は<青柴垣神事><諸手船神事>に現れる事代主命のことを知ることを思いました。松江に運んできました<古事記>を読み直し始め、国譲りのことに改めて感心したのです。

三保神社では繰り返し<和讃>という言葉聞きました。

観光協会の事務局長に「いろいろ考えていることを実行してみたいですが、活動資金がいくらありますか」と伺いました。「一銭もありません、給料からすべてやって下さい」この時は頭をかかえました。これだと何もできません。その頃です。新井満さんが電話をして来ました。あの「千の風になって」の曲を作った人、電通社員の身で芥川賞を受けた人です。

「半年のうちに、土地の新聞、山陰中央新報が一面に記事を掲げるような企画を打ち出さない」これが電通マンの発想です。

新井満を世に送り出したのは私です。どっちが偉いかなどはいませんが、新井満の上手をいかねばと思いました。半年というなら、私は三か月のうちにと思いました。幸い文藝春秋にいる頃、島根の同人雑誌の人々と親しくしていました。この方々にお願いしたのです。

「作家の方々を呼んで松江を観て、文章に、小説に書いていただきたいと思います。うものの、資金がない。ついては先生のお話を聞く集いを開きたい。名付けて、<松江文学学校>、協力して欲しい」

相談を持ちかけて2週間後に記者発表、3か月後に開校しました。山陰中央新報の一面の左トップに大きく記事が載りました。

受付初日、午前中のうちに200名の応募がありました。またたく間にウェイティングが150名に達しました。会費1万円。6回講座、その講師は芥川賞、直木賞の受賞者、中には立花隆さん、万葉集の研究者で文化勲章受章の中西進さん、私が親しくした作家、評論家、学者の方々。これは今日も続いています。

遠くは埼玉、東京、神奈川から、大阪、兵庫からも、西は鹿児島から、泊りがけで受講です。四国からも10名、近くが広島からは20名近くが通います。

文章また小説を書くときの考え方、文章の書き方、その方法を伝えることも大切ですが松江がよい観光地であるため、心のこもったもてなしのできる市民であって欲しい、そのために感性をゆるやかにし、表現方法の修練の場としたいと思いました。

「来て、見て、書いて」ということで松江にまつわるいくつもの文章、物語が生まれました。

出久根達郎さんは日本経済新聞の連載コラムで4回にわたって松江のことを書いてくださいました。

中村彰彦さんに堀尾吉春の物語をすすめたのは7年前のことでした。私の文藝春秋の後輩です。徳島の俘虜収容所、所長の会津人松江豊寿のことを書いた直木賞受賞作「二つの山河」をはじめ幾つもの作品のお手伝いをしました。

堀尾吉春はこれまで誰も書いていない。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3人に会い、いずれにもその人物を認められているのです。秀吉の天下取りのために、いずれの戦いでも、＜しんがり＞をつとめる勇猛な武将です。また、信長を頼った尼子主従、特に山中鹿介をお世話したのはこの堀尾吉春です。人の親として長男金助、二男忠氏、そして娘を亡くし、人生の苦悩を経験し、人格も実に深みのある人物です。

中村さんも60歳になり、人生の実りの時を迎えるいまこの人物を書くのは人間として、作家として大切と執筆をすすめました。取材にも付き合い、求める資料も届けました。＜小説宝石＞での連載は64回、5年半に及びました。最終回、堀尾吉春が松江城を造り、完成間近の城を眺め、松江の町づくりをしているところを書いている時「松江城を国宝に」との報せが来ました。

「戦国はるかなれど 堀尾吉春の生涯」、＜国宝松江城を造った武将の物語＞は11月20日単行本として出版されます。大変いい作品です。実力がありながら、決して表には出ず、控えめな生き方、実に堅実な暮らし方、読まれるとこの人が松江人の生き方を作ったと思われることでしょう。この連載小説を通して読んだ人は松江では私の知る限り二人です。一人は松江におられる堀尾家のご当主堀尾秀樹さんそして松浦市長です。

＜造った城が国宝になる＞その武将の物語を書き大団円を迎えるときに重なるという。このような縁はこれまでにないものです。

この「戦国はるかなれど 堀尾吉春の生涯」はこれから、たとえば大河ドラマなどの原作に検討されていい作品です。信長、秀吉、家康が登場します。愛知県大口町、静岡県浜松市、滋賀県長浜とめぐり広瀬町そして松江とゆかりの地も広がります。この広がりが視聴率を稼ぐ要素です。「花燃ゆ」の苦戦は「萩」に終始しているからだと思います。

中村彰彦さんには昭和2年に美保関沖で演習中の軍艦が衝突し、119名の

犠牲者を出した「海の八甲田事件」を物語にすることもすすめました。

五十嵐すぐるさんという犠牲になった「蕨」の艦長五十嵐恵少佐のご子息が書かれたドキュメントをもとに書くことを進めたのです。これと呼んだ中村さんは小説として作れる余地はない。これを再出版した方がいいとおっしゃいます。そして講談社の本でしたが角川文庫におさめるよう後おしして下さいました。この時、本のタイトル、＜黒き日本海に消ゆ＞を＜美保関のかなたに日本帝国海軍特秘密事件＞と改めて出版しました。そして、それを機にこういう犠牲の上に今日の日本があることを忘れないためにと記念碑を建てていただきました。毎年8月24日には境港の台場公園にある慰霊塔の前で慰霊祭が行われます。海の恵みを受けて町が成り立っている。その海で貴い生命を亡くされた方々へのこの町ならではの慰霊祭です。

＜松江文学学校＞の講師の方々、また、秋に催している＜松江ルネサンス、街角のお話会＞や＜講演会＞などこの10年間に120、30名からの作家、文化人を松江にお招きしました。おつとめいただき、帰途につかれる前に滞在した松江の感想をうかがい、ビデオテープに録音してそれを市民テレビ＜マープル＞で放送することにしました。すべて＜ノーギャラ＞です。撮らせていただいた70名ほどの人のものから、50名を活字にして、私が編集に携わっている＜古都松江＞に掲載しました。これが＜古都松江＞29号の特集「松江発見」です。どなたにも共通して「松江を一言で表現すると？」と問いました。50人、50通り。同じものがないのです。

＜ふるさと＞ 佐藤愛子さん

＜格のあるある大人の町＞ 杉本章子さん

＜水に浮かんだ睡蓮の花＞ 入江康夫さん

＜美しい黒い文化＞ 阿刀田 高さん

＜豊かさ＞ 黒田杏子さん

＜潤い＞ 中西進さん

＜和の風＞ 村松友視さん

＜日本の公園＞ 桂一さん

＜水と花＞ 早坂暁さん

＜静＞ 浅田次郎さん

＜懐かしさにあふれた町＞ 西木正明さん

＜映画の舞台にしたい町＞ 新井満さん

ふるさと松江がこのように言われているのです。50通りの表現をいただいても、言い尽くせないものが松江にはあるのです。

日本中さがしても、このような賛辞をいただいた町はありません。すごい町。

大変な町と外から来た人は言うてくださるのです。

こういうものを作り残すのが私の仕事の一つなのです。

「古都松江」ではいろいろな特集をしています。

第25号では「美しい私たちのまち」ということで25名の方にく私の松江三景>を上げていただきました。合計75の美しい松江の姿の紹介です。

第28号では「新作怪談」を企画し、載せました。落語に古典落語と新作落語があるように小泉八雲の怪談は古典的な名作です。八雲の「怪談」が出版されたのがちょうど100年前、ここで新しい平成の怪談があつていいのではありませんか。プロ・アマ問わず優秀作、八雲にちなんで、8編を選び、正賞は松江の石村漆工藝の器、副賞は5万円をさしあげるという企画です。これは全国の新聞に記事が載りました。480編の応募がありました。東京、神奈川、滋賀、大阪から受賞者にお超しいたき、贈呈式と発表朗読会を催しました。

この8編と松江の昔に題材を得たいかにも小泉八雲が好みそうな作品を選んで、さらに作家の方が八雲の魅力を語られた話をおさめて、一冊の本を作っています。＜松江の怪談＞、これは10月15日発売です。

私は松江に来る前から島根の情報をつぶさに観て、受けとめていました。

皆さんも受け取っておられる「シマネスク」という情報誌は私にとって絶好なふるさとの便りで、多くのものを学びました。近頃はありますが「島根と私」という著名人の随想がり、その松江について書かれたものを集めて一作をつくりました。＜和の心 日本之美 松江＞」です。

また、島根県観光連盟から出され、長らく古い情報のままに隅に置かれていた＜島根観光事典＞をもとに、私が改めて取材し、松江だけで一冊の本に作り直しました。＜松江観光事典＞です。かつての短い記事と写真が満載のガイドブックでは物足りない、そういう方が松江に来ておられるのです。

松江は都会が経済発展のため失った古き良きものが開発の粋からまぬかれて残っております。

日本人は本来、世の中が変化するなか、生き迷ったり、日々の暮らしから、うるおいが失われていくと感じた時、自然にならうことで安らぎを得、居ずまいを正すことで真の豊かさを取り戻す。そういうよきものを見つめ直す目を持っているのです。「松江」はそのときの定点、ジャーナリズムで他の町にはない特集が組まれるゆえんです。

「いかに時代が変わっても変えてはならぬものがある」どんなに暮らしが、変わっても大切にしなければならぬものがある」この観点から「まつえ」を見つめ、松江特集が編まれました。

その最初が昭和39年の東京オリンピックの年に「暮らしの手帳」の松江特

集です。花森安治さんの編集です。その特集を見て、後輩の編集者が松江特集を企画します。そういう優れた特集が雑誌が次の新しい号に入れ替わると、断裁され処分される。それは惜しいことです。ということで、それらをまとめて一冊にしたのが＜松江特集＞です。＜特集＞の＜特集＞です。すべて原寸のまま再現して掲載しております。

松江をたくさんの人に観ていただきたい。なかでもこれまで関心を持っていたけなかった東京、および首都圏の方々をいかに招き入れるか、これからの人々はせっかく行くのなら二泊、あるいは三泊くらいして、じっくり観たい、せっかくならいい宿に泊まり、ちょっぴりでいい美味しいものをいただきたい。

こういうお客さまにどのように働きかけるか、私の課題になりました。そのために最初に企画したのが文藝春秋画廊での古川誠さんの松江の写真展でした。

銀座の画廊では記録的な人の集まりとなりました。東京松江会のみなさんがたくさんの方をお誘い下さいましたお蔭です。その節はお世話になりました。

その次の年から早稲田大学のオープンキャンパス。社会人向けに＜松江＞＜島根＞の提携講座を企画したのです。小泉八雲をテーマに、古事記編纂1300年をテーマに、そして松江の人の生き方、島根の人で、近代日本に大きく寄与した人の業績を伝える連続講座です。早稲田大学に続いて明治大学でも行っています。

いずれも人気講座です。多くの方々が受講して下さいます。じっくりと学んで、知って、それをたしかめに行く、そういう人々が松江にお超すしになっているのです。そして、ゆっくり過ごされています。どこか違う、何となく落ち着く、ふるさとに戻ったみたいとおっしゃるのです。外国の方々、特に、フランスを中心の欧米からのお客さまに松江は注目されています。「本当の日本」(リアルジャパン)を紹介されているのです。このゆかしさは何だろう、控えめな人々の性格は何だろう、と思われています。

堀尾吉春が造った松江城は秀吉の造った大阪城より桁行(けんゆき)、梁間(はりま)共に一間ずつ少ない。これは自分がつかえた秀吉より大きいものは造らないという堀尾吉春の美德というものでしょう。風雪にさらされる漆喰壁は20年一回塗り直さないといけませんが、板壁は100年一度の手直しですみません。維持費は5分の1、城の用材は富田城を解いて運んで、それらを使っています。実に質素、そして堅実です。この城を見て松江城下の人には育ちます。ある種の合理主義、そして人を慮る性格がそなわっていくのは頷けます。城は町の人の気持、心のシンボルなのです。この心をさらに豊かにそして品性を加味したのが松平家代々の治世です。町そのものが日本の文化とっていいと思うのです。こうした心の根底にあるのが「古事記」に記されている、あの＜国譲り＞です。戦わず国を譲り、平和を選んだ＜和譲＞の精神を示した民族は

人類史上この出雲のみなのです。これは高邁な考えで、これを松江理解のなかでお伝えするのがわたしのつとめなのです。

それはちょっときれい事と思われる方もあるでしょう。もちろん私は「勝を譲る」「負けて勝つ」と出雲の人はよくおっしゃることもお伝えしています。

これに関心を寄せられたのが立花隆さんです。もう一度聞かせてくれと電話がかかってきました。立花さんがおっしゃるのです「なるほどそれを聞くと竹下や青木のことがよく分かる」

このことを「文藝春秋」の巻頭随筆に書かれています。

観光文化プロデューサーはこういうお手伝いもして10年を過ごして来ました。何となく松江が変わった、と言われるのは見る人の気持ち、見る目が変わったからです。この言葉を聞くのが何より嬉しいのです。

ご清聴ありがとうございました。